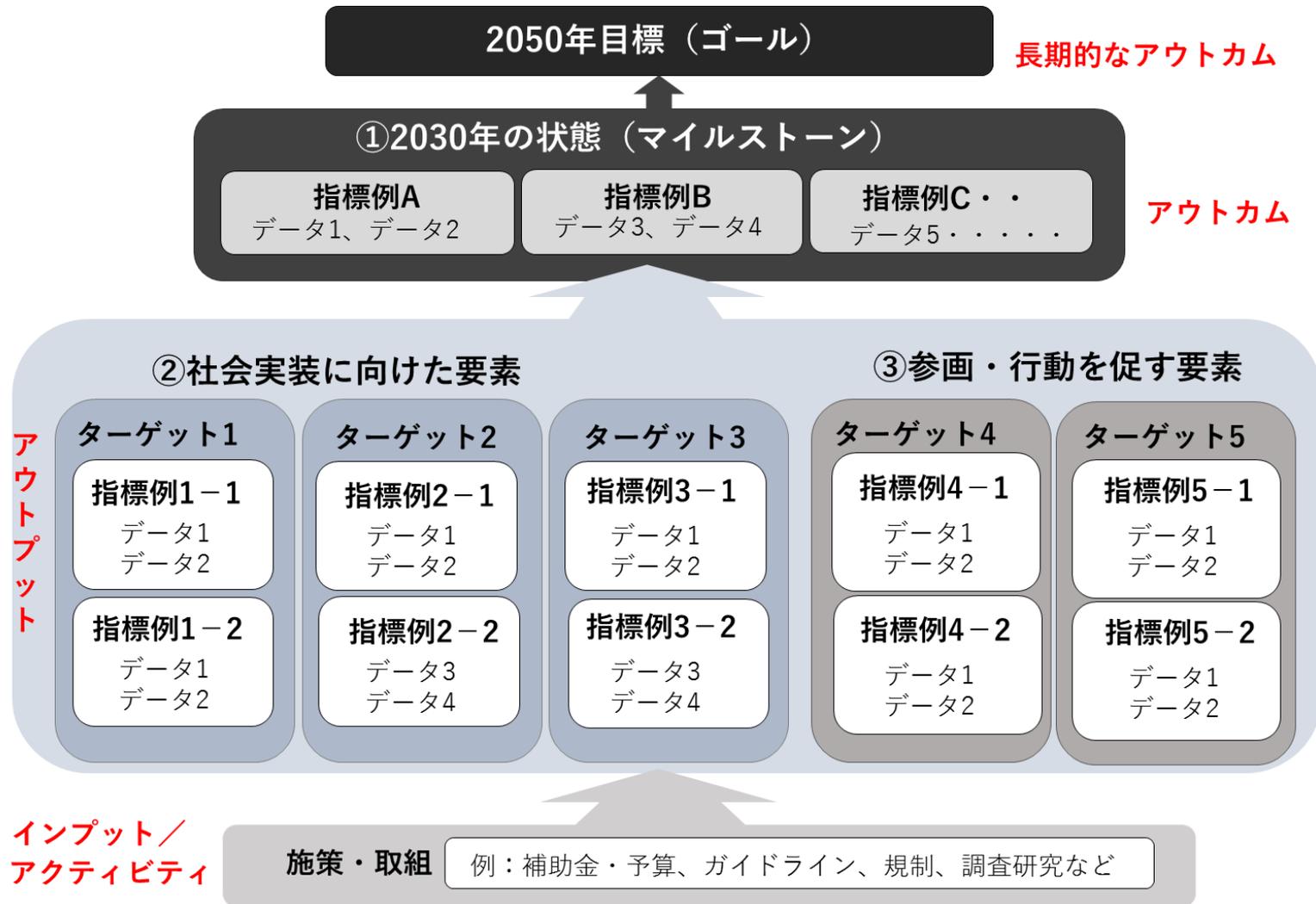


## 第3～6回研究会で議論した目標・指標の例の精査

1. 目標・指標の関係
2. 報告書の素案に沿った、研究会での議論  
(テーマ、資料)の目標・指標の組み換え
3. 組換後の目標・指標一覧  
(詳細は別エクセルファイル)
4. 目標・指標の設定にあたっての論点

# 1. 目標・指標の関係



第3回～第7回の資料で示してきた目標・指標の例について、関係性を可視化した図

(資料1の2. 参照) 2

## 2. 報告書の素案に沿った、研究会での議論 (テーマ、資料)の目標・指標の組み換え

※第6回研究会で示した「次期生物多様性国家戦略研究会報告書 骨子案」を元に作成された、資料4から一部抜粋。  
報告書の素案については、議事4で議論予定。議論を踏まえて再整理される可能性がある。

### 人口減少社会・気候変動に適応した自然を活かした 社会的課題解決の視点の強化

- 人口減少は、開発圧の減少により生物多様性の損失の回避にプラスの影響をもたらす一方で、人による働きかけにより形成・維持されてきた里地里山に生息・生育する野生生物の生息・生育環境の消失や、生息域を拡大する鳥獣との軋轢の激化など、マイナスの側面もある。特に担い手の不足への対応や新たな管理の在り方の構築は次の10年間の大きな課題。
- 人口減少により生じた空間的余裕は、自然生態系を活かした防災減災等、自然を活かした社会的課題解決を進めやすくする要素となりうる。
- 次の10年間は集中型か分散型かの分かれ目となるとの指摘もある。この次の10年間に、人口減少×自然を活かした社会的課題の解決の道筋をつけることが重要。

### ビジネスと生物多様性との好循環とライフスタイルへの再浸透

- 直接要因への対応だけでは生物多様性や生態系サービスの損失・劣化は止められないことから、社会経済の在り方やライフスタイルと深い関係にある間接要因への対応が大きな課題。これを避けては自然との共生は達成することができない。
- 生物多様性の損失は、ビジネスのリスクであると同時に、持続可能性の確保は企業価値創造のチャンス。このため、ビジネスと生物多様性の好循環に向けた主流化が不可欠。
- また、社会変革においては、個人や社会の行動（振る舞い）と価値観を変えていくことが不可欠。

### 自然共生社会構築に向けた基盤としての生物多様性の確保

- 生物多様性への不可逆的な影響の回避のため、種の絶滅を将来にわたり回避するレジリエントな生態系の構築
- アウトカム評価につながる基礎的調査の充実、各種モニタリング情報等の統合化・提供、効率かつ効果的な調査技術（AI含む）の開発・実施 など

## 2. 報告書の素案に沿った、研究会での議論 (テーマ、資料) の目標・指標の組み換え

### 第3回

人口減少下での国土利用のあり方と自然と共生した安心・安全な地域づくり

- 資料2-2 二次的自然環境の保全と管理
- 資料3-1 ランドスケープアプローチ
- 資料3-2 生態系を活用した防災・減災
- 資料4 生物多様性と地域づくり

### 第4回

身近な地域から地球規模までの自然資源利用における持続可能性の確保

- 資料3-1 事業活動における持続可能性の確保／生物多様性への配慮
- 資料3-2 事業活動による国内の自然資源の活用と生物多様性の保全
- 資料3-3 ESG金融を通じた企業の生物多様性への配慮の促進

### 第5回

生存基盤である生態系のレジリエンス確保と新たなリスクへの対処

- 資料3 保護地域等の国土空間的施策について
- 資料4 野生生物系の横断施策について

### 第6回

身近な暮らしに提供される自然の恵みの確保と自然に配慮したライフスタイルへの転換

- 資料3-1 持続可能な農林水産業と支えるライフスタイル
- 資料3-2 自然とふれあう豊かなライフスタイル
- 資料4 行動と価値観を支える教育と文化

### 第7回

ポスト2020枠組を踏まえた、自然共生社会の実現に向けた方策と基盤整備の取りまとめ

- 資料2 政策を支える科学的基盤の強化に向けた調査・管理体制の推進・整備

人口減少社会・気候変動に  
適応した自然を活かした  
社会的課題解決の視点の強化

ビジネスと生物多様性との好  
循環とライフスタイルへの再  
浸透

自然共生社会構築に向けた基  
盤としての生物多様性の確保

# 3. 組換後の目標・指標一覧

## 組換後の目標・指標一覧（資料3-2別添）の構造模式図

アウトカム

アウトプット

|  | 目標                                 | 指標（例）     | データ等            |
|--|------------------------------------|-----------|-----------------|
| ①<br>2030年の状態<br>(マイルストーン)                       | 2030年の状態<br>(目標) の例                | 指標例 A     | データ1、データ2、データ3… |
|  |                                    | 指標例 B     | データ1、データ2、データ3… |
|  |                                    | 指標例 C     | データ1、データ2、データ3… |
| ②<br>社会実装に向けた要素<br>③<br>社会実装に向けた要素<br>参画・行動を促す要素 | ターゲット 1<br>(社会実装に向けた要素/参画・行動を促す要素) | 指標例 1 - 1 | データ1、データ2、データ3… |
|  |                                    | 指標例 1 - 2 | データ1、データ2、データ3… |
|  | ターゲット 2<br>(社会実装に向けた要素/参画・行動を促す要素) | 指標例 2 - 1 | データ1、データ2、データ3… |
|  |                                    | 指標例 2 - 2 | データ1、データ2、データ3… |
|  | ターゲット 3<br>(社会実装に向けた要素/参画・行動を促す要素) | 指標例 3 - 1 | データ1、データ2、データ3… |
|  |                                    | 指標例 3 - 2 | データ1、データ2、データ3… |

各記述を測る指標

各記述を測る指標

各記述を測る指標

各記述を測る指標

各指標をあらわすデータ群

各指標をあらわすデータ群

# 4. 目標・指標の設定にあたっての論点

## 【目標・指標の設定に関する議論のポイント】

- ①目標・指標設定における原理原則とはなにか。
- ②それぞれの目標を代表する指標として何がよいか。
- ③関連性の低い目標・指標・データはないか。

## 1 マイルストーン（2030年の状態）の項目と記述

- 2050年の自然共生社会を実現するのに現在のマイルストーンの項目・内容が十分か
- 「[X%] 削減」などの定量的記述と定性的記述のどちらが望ましいか
- エビデンスベースの（特に生物多様性の状態の）望ましい水準（=X%など）
- 目標を達成したかどうかの判断の考え方をどう整理するか

### ➡【ポイントとなる考え方】

- ✓ 2050年の「自然との共生」の長期目標に向けて、必要かつ現実的な目標（マイルストーン）を設定する必要がある。
- ✓ 定量的な目標と指標の設定を検討する。
- ✓ 計測が困難であることのみをもって、目標設定を妨げない。
- ✓ 各目標・指標の有する関連性や確からしさの程度を意識した上で、施策を進める。
- ✓ 2030年までに実現すべき状態を明確にした目標を設定する。

## 4. 目標・指標の設定にあたっての論点

### 2 2030年の状態（アウトカム）と社会実装／参画・行動へのターゲット（アウトプット）の整理、精査等

- 実装すべきことや実装のために必要な手段等がマイルストーンに書き込まれている場合が多く、ターゲットとの記述の区別や整理が必要
- [実装・状態・手段] の書き分け
- アウトプットはアウトカムを実現する十分なものになっているか

#### ➡ 【ポイントとなる考え方】

- ✓ 獲得が期待される成果（アウトプット）、その結果としての生物多様性保全等の効果（アウトカム）までの道筋を可能な限り論理的に整理し、区別する。
- ✓ エビデンスに基づく政策立案を目指して、ロジックモデル等によるアウトカム評価を検討する。
- ✓ ただし、アウトカムの発現には時間を要することにも留意し、効果の有無や程度と、効果の発現時期の相違を認識する必要がある。
- ✓ 2030年までに行うべきことを明確にした目標の設定を行う。
- ✓ 生物多様性に係る国際的な枠組みや気候変動等の関連する課題の動向、調査研究の進展等も踏まえ順応的な姿勢で設定を進める。

# 4. 目標・指標の設定にあたっての論点

## 3 数値目標、指標の設定

- 目標達成のわかりやすさなどのため「代表的な指標」を設定できないか
- 数値目標はどのように設定することが考えられるか
- 生物多様性の保全を考慮したエビデンスベースの数値設定が可能か
- 数値目標のために考慮が必要であるベースラインをどうするか

### ➡【ポイントとなる考え方】

- ✓ 目標と関係性の深い「代表的な指標」と「それを補完する指標」（代表的な指標の設定が困難な場合等に設定する指標）を区別する。
- ✓ わかりやすさの観点から「代表的な指標」を限定する。
- ✓ 既存の指標にこだわらず、2050年の自然との共生に向けて今後必要と考えられる指標を設定する。
- ✓ 計測が困難であることのみをもって、目標設定を妨げない。
- ✓ 各目標・指標の有する関連性や確からしさの程度を意識した上で、施策を進める。
- ✓ 生物多様性に係る国際的な枠組みや気候変動等の関連する課題の動向、調査研究の進展等も踏まえ順応的な姿勢で設定を進める。

# 4. 目標・指標の設定にあたっての論点

## 4 参画を促すための数値目標や指標の設定

- 企業や個人の参画を促すための人の働きかけと生物多様性の状況とをつなぐわかりやすい指標の設定が考えられないか

### ➡【ポイントとなる考え方】

- ✓ 獲得が期待される成果（アウトプット）、その結果としての生物多様性保全等の効果（アウトカム）までの道筋を可能な限り論理的に整理し、区別する。
- ✓ 企業・各種組織・個人等の行動・努力の積み上げや、行動を促す目標や指標を設定する。

- OECM等の民間を主体とする保全等に資する目標や指標の設定
- 個人、企業、民間団体による生物多様性保全や配慮の促進に資する直接及び間接的な目標や指標の設定

例：努力量が積み上げられるもの

投資家や消費者の生物多様性への意識の動向

個人の行動を促す消費や環境インパクトに関する情報開示